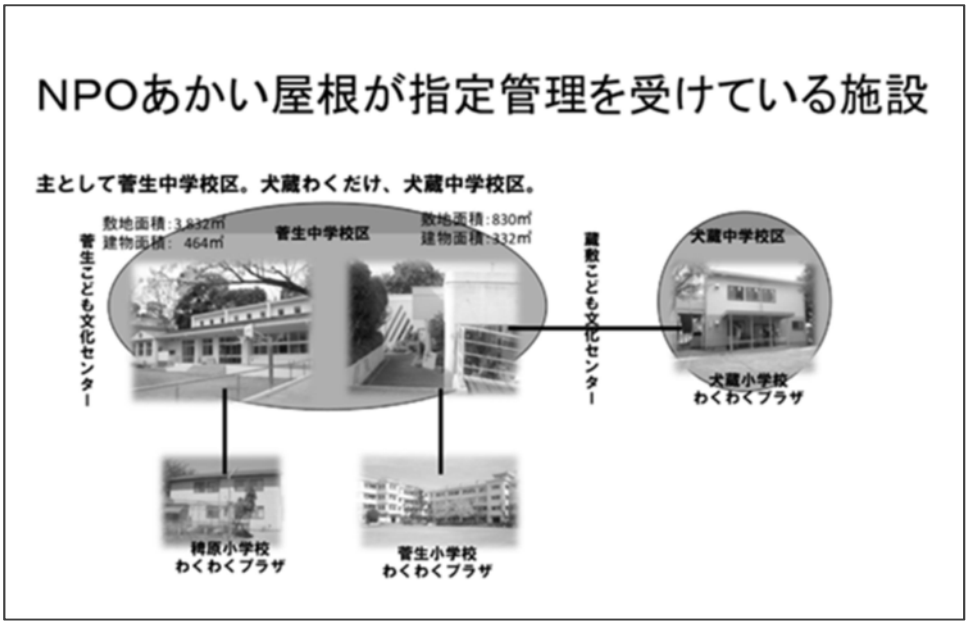
（３）針山 直幸氏

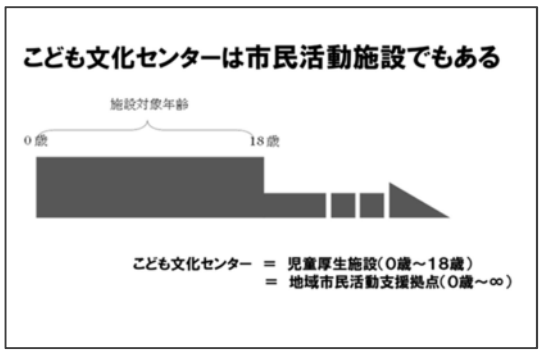
NPO法人あかい屋根 菅生こども文化センター統括館長。菅生・蔵敷こども文化センターを拠点に、地域とのつながりを重視して、児童の健全育成や市民活動の活性化を中心としたまちづくりの事業を実施している。

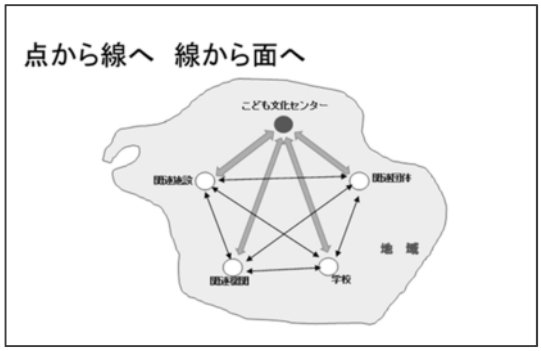


私たちは宮前区内２か所のこども文化センターの指定管理者として、施設をお預かりしている立場です。現在お預かりしている施設は、宮前区西北部の菅生中学校区に位置する菅生と蔵敷のこども文化センター、それに付随する稗原小学校、菅生小学校、犬蔵小学校のわくわくプラザです。

菅生こども文化センターは、敷地面積が約4,000平方メートル、建物面積が464平方メートルと、こども文化センターの中では比較的規模が大きく、敷地内にはモンキーブリッジやターザンロープ、冒険タワーなどがあり、子どもが野山を駆け巡っています。その他、庭にはバスケットゴールや夜間照明設備があり、集会室には大鏡があり、中高生の居場所にもなっています。

蔵敷こども文化センターは、敷地面積830平方メートル、建物面積332平方メートルと、非常に小規模で民家に隣接しています。民家の掃除機の音が聴こえるくらいの近さであり、逆に言えば私たちがどれだけ皆さんにご迷惑をお掛けしているかということだと思います。それでも、蔵敷こども文化センターを利用する子どもにもいろいろな体験をしてもらいたいと思い、月１回程度、菅生緑地などの近隣の公園に子どもを連れて行き、仮設の遊具を設置して思い切り遊べる場を提供しています。



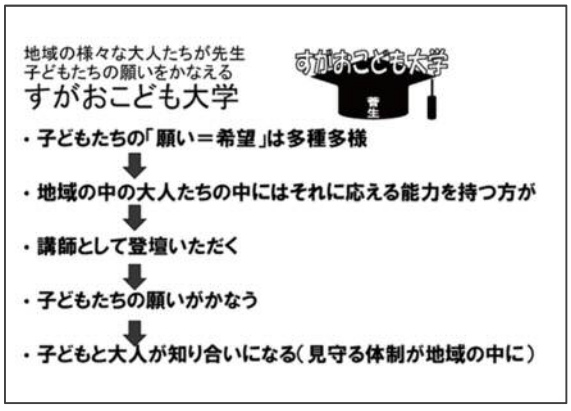


NPO法人あかい屋根が目指しているものとして、遊び場の提供の他に２点をご紹介します。

ひとつは、こども文化センターの管理運営です。こども文化センターは、児童厚生施設として建てられ、法的には０歳～18歳が対象です。また、川崎市の地域市民活動支援拠点として位置づけられ、誰でも利用できる施設になっています。子どもが学校に行っている午前中の時間帯を中心に、囲碁や健康体操、卓球、フラダンスなどで、幅広い年代の方にご利用いただいています。市民活動の拠点として活動を支援するために、印刷機だけではなく、所有しているプロジェクターやスクリーン、餅つきセットなどの季節備品、軽トラックまで、さまざまな物をご利用いただいています。

こうした支援により市民活動は活性化し、逆にこども文化センターが多くの皆様にご支援をいただいているのです。

もうひとつは、地域の絆を大切にしていることです。施設は地域にとって「点」の存在ですが、施設と施設がつながって線が生まれます。施設だけではなく、関連機関や関連団体、個人などとつながるいろいろな線が増えることにより、やがてそれが網目模様や面になっていくことを目指しています。



その実践例が「すがおこども大学」です。子どものやりたいことは実にさまざまです。職員の持っていない能力が必要となった場合、地域の方の能力は無限大です。その能力を生かして講師としてご登壇いただき、子どもの夢を叶え、大人と子どもが知り合いになる、その場面を作ることを「すがおこども大学」と呼んでいます。こども文化センターが市民活動を支援し、市民の皆さんにこども文化センターを支援していただく取組です。

写真は、「大学」の一環として、障害者施設「はぐるま工房」で芋煮会をしたときのものです。地産地消、菅生でできた物を食べようという目的で、子どもは障害者の皆さんが作った里芋や大根を収穫させていただきました。収穫のときは、障害者の皆さんが先生となり、収穫した物を調理するときは、逆に子どもが先生となりました。貴重なひとときを過ごすことができました。

この写真は、１月のお茶会で初釜を行ったときのものです。私たちの指導で子どもが花びら餅を作り、それをお茶菓子にして、お茶のたて方やいただき方を講師の方から伝授していただきました。

この泥団子は、子どもが砂場で作っていたものです。「まんまるのを作ってみたいなぁ」と子どもは言うのですが、職員はどうやっても丸いものが作れません。この作り方を知っている人が地域にいました。田んぼの土（荒木田土）を２か月くらい固めて作るそうです。牛乳瓶や梅酒の瓶でコロコロと口を回していくと、まんまるなものができました。このようにノウハウを持っている方は、地域にたくさんいらっしゃるのですね。

もうひとつの実践例が「すがお手つなぎまつり」です。これは、施設や団体、個人がつながっていくことにより絆を深めて、やがては点から面へと変貌していこうというものです。菅生中学校区にあるすべての子育て関係施設が、実行委員となっています。まだまだ模索中ですが、商店街やＪＡ、郵便局、金融機関、地域の店舗などの他、今年度からは正式に地域を代表して自治会からの支援が受けられることになりました。

今年は11月14日に開催する予定で、地域子育て支援センターすがおを中心に行います。もしお時間がありましたら、第３回の祭りに来ていただけたらと思います。

写真は、昨年の祭りの１コマです。オープニングでは、子どもによる司会、区長の挨拶、菅生中学校吹奏楽部の演奏、参加者がパラシュートに色とりどりのボールを乗せて跳ね上げる祭りを行いました。数々のイベントでは、地域の高齢者を支援する団体が子どもに折り紙を教えたり、子ども会や子ども組織が店を出したり、クラウンがアートバルーンを作ったり、宮前区キャラクターのメローやコスミンも子どもと遊んでくれました。エンディングでは、参加団体がアピールタイムでどんな活動をしているか話をしていたら、２～３歳の子が「僕も話したい」と飛び入りで参加する場面もありました。保育士が踊り始めると子どもも踊り、最後には参加者全員でキラキラ棒と呼ばれるものを振って、また来年行うことを約束して散会しました。

私たちが地域の絆の他に大切にしていることは、子どもの声に耳を傾け共感することです。利用者が幼児や小学生の頃からとにかく話を聴く、すると子どもは「話を聴いてもらえる」と感じて、中学生や高校生になっても、事あるごとにこども文化センターにやって来て話をしてくれます。

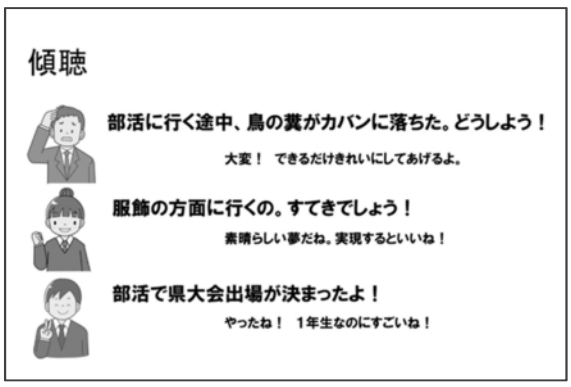
また、助けを求めて来ることもあります。日常的な話を聴いていて、大きな問題に直面することもあります。親から虐待を受けて顔にあざを作って来ていた子がいましたが、自分から「虐待を受けている」とはなかなか言い出しません。親のお金を盗んだと決めつけられて、「もう家にはいられない」と家出をしてきた子もいます。中学校の先生に金髪を注意され、授業から追い出されて「黒色に染めてこい」と言われた子は、「金でも黒でも染めるのは同じじゃないか」と言っていました。苛立ちをどうにもできず、こども文化センターのトイレをガンガンと殴って穴を開ける子もいました。

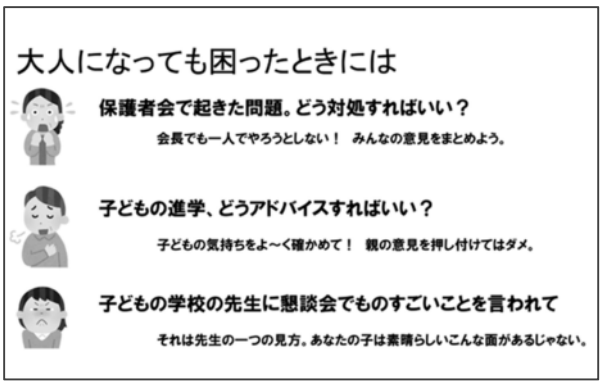
そんなことも受け止めて共感して、どうすればよいかを一緒に考えます。必要なときは専門の相談機関につなげたりします。子どもの思いを大切にして理解してあげることが、こども文化センターの大事な役割だと考えています。

平和に見える菅生地区でも、子どもはＳＯＳを常に出し続けているのです。２月に起こった川崎市内の中学生殺害や６月の岩手県矢巾町のいじめによる中学生自殺のようなことが、この地域に起こりませんように、ＳＯＳを見逃さないようにしていかなければならないと思います。

このような日常を長く続けていますと、大人になっても困ったときに、話や相談に、涙を流しに、こども文化センターにやって来ます。よちよち歩きだった子どもが声変わりをして、さらに「今度一緒に飲もうよ」と声が掛かるようになります。「彼女ができた」「子どもが生まれた」などという報告もあります。「奥さんが産気づいてどうすればよいか」「親父が危ない、どうしよう」など、センターより病院に連絡をした方がよいこともあります。

いつまでも関わりを求められ、この仕事の冥利に尽きると感じています。





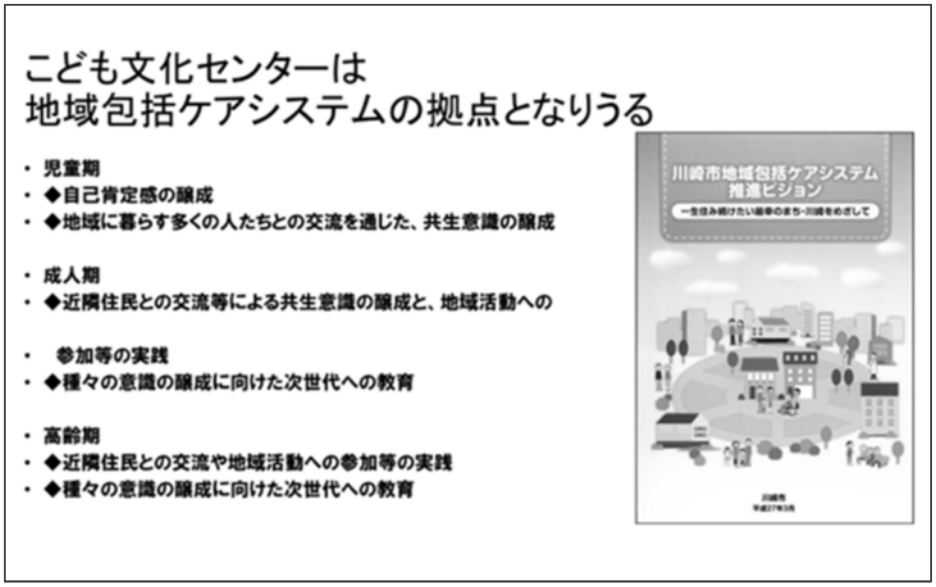
高齢者になっても、こども文化センターとの関わりがあります。

センターは昭和50年に開設し、もう40年が経ちました。当時、菅生には自然がいっぱいだが文化がないということで、子どものためにセンターが欲しいと住民運動を起こし、当時の市長と一緒になって協働の成果として、センターが建設されました。

現在では、子育てが終わり、多くの子どもは独立して菅生を離れてしまいました。親だけが高齢者世帯となり、車の運転がおぼつかなくなり免許を返納せざるを得ない世代になっています。しかし、医療機関に行く方法がなく困り果てている世帯もあります。

いつまでも健康でなじんだ地域で暮らしたいという願いを少しでもお手伝いできたらと、福祉移送サービスを１年前から始めました。黄色の小さい軽自動車で、２kmまで500円、１km毎に150円です。ワンコインでなるべく移動できるようにしています。

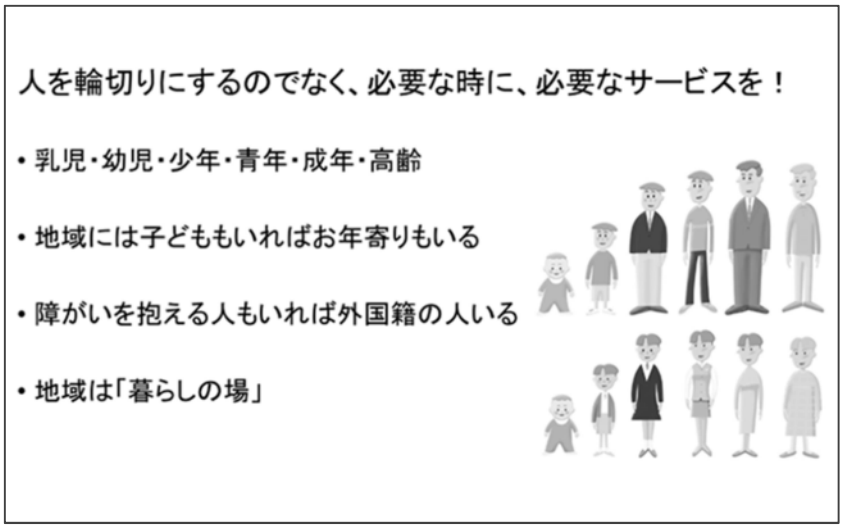
こども文化センターの素晴らしさとは、０歳から18歳まで継続してひとりの子どもの成長を見守ることができることです。保育園や小学校と違い、これだけ長く子どもと関われる施設は他にありません。さらに、18歳に限定されず、大人になっても高齢者になっても利用できるこども文化センターでありたいと、私たちは願っています。



川崎市の地域包括ケアシステムは、対象を高齢者に限定しないということを、私たちはすごいと思っています。行政は、法律によって乳幼児、高齢者などと年齢で分けて考えがちです。法律だから仕方のないことかもしれませんが、私たちは地域という暮らしの場をベースにして予断なく生きているものです。地域には、赤ちゃんもいればお年寄りもいる、元気な人もいれば病気の人もいる、障害を抱えた人や外国籍の人もいる。そんな地域で、共に生きていくことが楽しく当たり前になっていく必要があるのではないかと思います。

そのためには、地域の醸成が欠かせないと思っています。すがおこども大学の実践やすがお手つなぎまつりの取組はほんの一部ですが、子どもからお年寄りまで、こども文化センターを起点に地域の醸成をしていくことは十分可能だと思っています。新たな拠点を考えていくのではなく、中学校区に１か所あるこども文化センターの活用を図っていくことも、ひとつの方法ではないかと思います。

また、「命の尊さを100回唱えるより、あなたの生きていることへの感謝を伝える方が有効」と言われます。あなたが生まれてきてくれてありがとうという感謝。あなたは必要な人間で、あなたを知ろう、理解しようという傾聴をすること、あなたの力を皆のために生かそうと社会参加を促進すること、あなたが生活することで困ることがあったら私にできることはないかという絆により、自己尊重感が育成されるのだと思います。



人の暮らしの場が地域でございます。地域包括ケアシステムの実現が、行政の旗振りだけではなく、輪切り、縦割りになっているものをつなぐことができるのは地域の人であると信頼していただき、地域の醸成や育成支援にある程度腰を据えてじっくり取り組んでいただけたらと思います。ありがとうございました。